

【問題】(演習)

出典…紫式部『紫式部日記』冒頭に近い一節 / 鹿児島大学 法・文学部 93年

現代語訳

(対の屋の端の) 渡り廊下の戸口(近くにしたらえた自分)の控え室で(お庭のほうへと)見やると、うつすらと霧がかかっている。早朝の露もまだ(葉先から)落ちない(ほどの早い時間な)のに、道長さまが(お庭を)お散歩あそばして、御隨身をお呼び寄せになつて、(池に水をひく)遣水(にたまった落ち葉など)の掃除をおさせになる(ところが見えた)。(その遣水にかかっている)橋の南側に(植えられて)ある女郎花(をみなへし)でたいそう(美しい)盛りに(咲いて)いるのを、一枝お折り取りあそばして、(そのまま私の部屋の前)に立てた几帳の前までいらして、女郎花の花を(几帳の上からさしかざしながら覗き込んでおいであそばす(その)お姿が、こちらがはずかしくなるほどたいそう御立派なのに、(それにひきかえ)自分の寝起きの(ろくに化粧もしていない)顔の(見苦しいこと)が身にしみて感ぜられたので、(道長さまが)「こ(の花にことよせた歌を詠むの)が遅く(なつ)てはよくないだろうよ」と仰せになるのをよしおにして、硯のおいてあるところに寄つ(て顔を隠した)。

女郎花……(殿さまのお持ちになった)女郎花が(朝露を含んでみずみずしく)美しく咲き誇っている色を見るとすぐさま、(その)朝露がわけへだてし(て宿ってくれないほど盛りを過ぎて容色の衰え)た(自分の)身のほどが思い知られることです

「いやあ、(歌を詠むのが)はやいね」と(道長さまは)にっこりして(私の使っている)硯を(局の中から)お取り寄せになる。

白露は……白露は(なにも)わけへだてして宿っているわけでもないだろうよ。女郎花は(見事に咲こうという)自分の気持ちがあるからこそ、盛りの色に染まっているのではないだろうかね、(あなたもそれと同じで、そう卑下してばかりいずに気の持ちよ)うで自分でも美しいと思うようになれるはずの人だと思っっているよ)

問1 Aは使役の助動詞であるのに対して、Bは尊敬の助動詞である。〔29字〕

問2 早朝に目が覚めたばかりで化粧もしておらず見苦しい顔のこと。〔29字〕

問3 道長のくれた女郎花の花に因んで、紫式部が即興的に歌を詠むこと。〔31字〕

問4 道長さまのお持ちになった女郎花が、朝露を含んでみずみずしく色美しく咲き誇っているのを見るにつけても、その朝露がわけへだてして宿ってくれないほど盛りを過ぎて容色の衰えた自分の身のほどの情けなさが思い知られることです。〔107字〕

問5 紫式部が、女郎花にことよせて道長の立派さを称えつつ自分の容姿を嘆いたのに対して、道長も同じ女郎花を詠み込みながら、それは自分の思い込みで、心の持ちようで美しくもなるものだと紫式部を慰め励ましている点。〔100字〕

出典…藤原道綱母『蜻蛉日記』(巻二「町の小路なる女」)「うつろひたる菊」の一節 / 九州大学 文学部 99年

現代語訳

私の家から、夕暮れ時に、「宮中の方角が方塞かたふたがりになっていたよ(だから出かけなくてはならない)」と言って(夫が)出ていくので、(私は)臍はらに落ちないで、(夫のあとから)召使いにあとをつけさせてみたところ(「夫の行き先を確かめさせたところ」)、「町の小路にあるこれこれの場所に、(兼家様のお車が)おとまりになりました。」と(召使いは)言って(報告して)きた。「やはり(私が)予想していた通りであったよ」と、(私は)ひどくつらいことだとは思ったけれども、(夫に対して)何と言ったらよいかその言葉も見つからないでいるうちに、二三日ほどたつて、夜明け前ごろに、(誰かが)門を叩くことがあった。(私は)「夫の訪れであるようだ」と思うけれども、不愉快で開かせないでいると、例の(女の)家と思われるあたりへ行ってしまった。翌朝、(私は)このままおとなしくしているわけにはいきまいと思って、

なげきつつ……(夫の訪れがないのを)嘆きながら(わびしく)独りで寝る、(その)夜が明けるまでの時間は、どんなに長い(と感じられる)ものか、(あなたは)ご存知ですか(、いいえ、とてもおわかりにはならないでしょう)

と、いつもよりは改まった(筆跡で)書いて、色の褪せはじめた菊に添えて贈った。(夫からの)返事は、「夜が明け、そして門が開くまで(待って)、様子を見ようと思ったのだが、急用の召使いが来合わせてしまったのでね(、やむをえず出かけたのだ)。(しかし、そなたのお腹立ちも)至極当然で、無理もないことよ。

げにやげに……ごもつとも、ごもつとも。(そなたの言う通り)冬の夜(がなかなか明けないのはつらいものだが、その冬の夜)ならぬ真木の戸(「門」)も、なかなか開けてもらえないのはつらいことだなあ」

それにしても、(夫は)全く気が知れないほどに、何でもない当たり前のことのように(けろりと)している。しばらくの間は、(私の手前を)憚おそって(嘘とわかっていても)、「(急用で)参内のために(出かけた)」などと言ってはその場を取り繕うべきなのに、(言い訳一つしないので)ますます気に食わないと思うことこの上もなかった。

問1 (ア) 夫の後から召使いにあとをつけさせて夫の行き先を確かめさせたところ、

(イ) やはり私が予想していた通り夫は浮気をしていたのであったよ

(ウ) 夫は夫に対して、何と言ったらよいか、その言葉も見つからないでいるうちに、

(エ) 夫の訪れであるようだ

問2 意味 改まった筆跡で書いて

気持ち 夫の浮気を知ったことで、夫に対し距離をおき、夫に冷たくしようという気持ち。

問3 花の盛りを過ぎて色が褪せはじめた菊。

夫の自分に対する愛情が衰え、他の女性に心が「移ろ」ったことを暗示し、また、うちしおれた自分の姿をなぞらえて表現しようとした。

問4 掛詞 かくる

二つの意味 独り寝の夜が「明くる」の意と、真木の戸を「開くる」の意。

問5 自分が、門を開けるまで待ちきれずによそへ出かけて行ってしまったことに対する、作者の立腹。(44字)

問6 宮中(内裏)

問7 作者名 藤原(右大将) 道綱の母(藤原倫寧女)

夫の名 藤原兼家

問1 現代語訳問題。諸君がこれから学習していく「受験古文」においては、漠然とした曖昧な答案をいくら書いても高得点にはならない。ポイントを明確に押さえた適切な現代語訳を作るためのトレーニングを意識的に行うようにしてほしい。ここでは①逐語訳を作る↓(ウ) ②省略文節の補入↓(ア) ③指示内容の明示↓(イ)(エ)と、それぞれの段階を特化して解説を行っておく。

(ウ) 逐語訳を正しく行うためには文の構造を的確に捉える力が必要である。高3になったばかりの段階だと、(ウ)くらいがその力を試す試金石として手ごろであろう。もし、(ウ)の構造が理解できなかった諸君がいたとしたら、早急に日本語文の構造について確認しておいてほしい。この程度で躓いてはダメである。

さて(ウ)の構造だが、基本は「ほど」という体言に格助詞「に」がついているだけの簡単なもので、その体言「ほど」に「言はんやうも知らである」という連体修飾部がかかって全体を構成している。前後のつながりからこの場合の「ほど」は「うち・頃」の意なので、「ほど」は基本語彙である)、「なうちに・な頃に」という意味になる。あとは「言はんやう」の部分。「言はんやう」(これも細かく分析すれば「言はん」が体言「やう」を修飾している構造)が「知る」の客語(＝目的語)になっていることが見抜ければ、それで構造理解としてはおしまい。体言が用言に係る場合格助詞を伴うことが普通だが、主格と目的格の場合は格助詞が省略されやすいという知識(現代日本語でも大差はない)を使えば簡単だろう(因みに「も」は係助詞)。「やう」は「方法」ということだから、逐語訳は「言うような方法も知らないでいるうちに」となる。あとはこれを文脈に即して処理していけばよい(その具体的な方法は次に述べる)。

(ア) この構造は容易に理解できただろう。逐語訳は「人を付けて見させたところ」となる。注意する点があるとすれば、最後の「已然形+ば」。これは通常《原因・理由》の意でとるが、ここはそれでは後に繋がらないので《偶然条件》で訳す。

さて、右のような逐語訳ができれば、次は「省略文節の補入」という作業が待っている。その際の着眼点は述語(ないし用言)である。この場合であれば、「付ける」と「見させる」に着目する。「付ける」という言葉は「AがBをCに付ける」という構文をとる。また、「見させる」は「AがBにCを見させる」という構文をとる。この点から右の逐語訳を眺めると、「付ける」の方には「Bを」に相当する「人を」という言葉はあるが「Aが」「Cに」に相当する要素がない。とすれば、これを補うことになる。同様に「見させる」の方も「Aが」「Cを」に相当する要素が欠けている(「Bに」の要素もない、と思った諸君がいたかもしれないが、それは直前の「人を」が担っている)。とすれば、省略文節を補入した後の形としては「AがBに人を付けてCを見させたところ」

となることがわかる（このABCは右のそれとは必ずしも対応していない）。後は前後の文脈に照らして、これらを実際に補入するだけである。

Aに相当するのは、この日記を書いている作者すなわち「私」。Bは、「出づる」という動作を行った人物すなわち「夫」。Cは、「町の小路なる」という「人」の報告から「夫が何処に向かったのか・夫の行き先」となる。これらを補った「私が夫に人を付けて夫の行き先を見させたところ」が一応の答案になる（解答例では「人」という臚化表現を「召し使い」と具体的に訳し、もう少し日本語としてすっきりしたものにしてある。同様の処理は(ウ)についても施してある）。

(イ)(エ)のポイントは「指示語の明示」である。(イ)は慣用句なので「思った通りだ・やっぱり」と訳すが、原文には「さ」という指示語があるのでこの内容を明示する（＝具体的にどのような内容が「思った通り」なのかを明示する）必要がある。また、(エ)「さなめり」の逐語訳は「そうであるようだ」だが、この「そう」の内容を明示する。

まず(イ)だが、これが「町の小路なる」という召し使いの報告を聞いてのものであること、及び注やリード文を参考にすると、ここで「夫の浮気」に気付いたということだとわかる。「思った通り夫は浮気をしていたのだ」ということである。

また(エ)は、直前の「あかつきがたに門をたたくときあり」がヒント。誰かがやってきたことに対して「そうであるようだ」と推測しているのである。では、誰がやってきたと「私」は思ったのか。続く和歌の贈答から、それは「夫」だとわかる。

問2 「ひきつくろふ」とは「体裁を取り繕う」ということ。したがって、意味は「改まった筆跡で書いて」となる。

理由説明のポイントだが、何故このときの「私」はいつもより改まった筆跡で歌を書いたのかを考えることにある。次の「うつろひたる菊」もヒントになるが、①夫の浮気を知っている②しかし夫は二三日後何食わぬ顔で「私」の家にやってきた、という点から、「そういう夫に怒って少し冷たい態度に出たのだろう」ということを推測したい。

但し、四月の現段階でこの問題が解けなくても気にすることはない。一足飛びにあれもこれもと手を広げるのではなく、一つ一つ着実にステップアップしていけばよい。

問3 「うつろふ」とは「花が散る・色褪せる・色が変わる」の意。ここは「夫の浮気」を風刺している場面なので「色が変わった菊」ということになる。

「何を表わそうとしているか」は、先に記した通り「夫の浮気」である。古文では、自然と人間を対応させて表現することが多い。その典型が和歌の掛詞なのだが、その対応は必ずしも和歌に限定されるわけではない。普段からそのような対応関係に意識を向けしておくといえよう（掛詞の知識を手がかりにするといえ）。花の移ろいと心の移ろいを対応させるのは古文の常套手段である。それゆえ、この設問は本文の正確な読み取りを基にして解くというより、古典常識から解くというのが理想的なやり方であろう。なお、解答例では「うちしおれた自分の姿をなぞらえて表現しようとした」ということまで書いておいたが、今の段階でそこまでする必要はない。まずは、古文特有の対応関係（「秋」の到来と「飽き（＝恋人の私への嫌気）」の到来の対応など）に注意を向けるところから始めよう。

問4 掛詞の指摘だが、それほど難しくはなかったであろう。掛詞を発見するためには、①地名表現に注目する②和歌の詠まれた状況に注目するなどの方法があるが（もつとも、頻出するものは知っておくべき）、ここでは②の方法を使う。

この和歌は、私が門を開けさせなかったために帰ってしまった夫に贈ったものである。そして、和歌にも「あくる」という言葉がある。とすれば、ここが掛詞で、「夜が明ける」意の「明くる」（＝和歌の文脈から想定できる言葉）と「門を開ける」意の「開くる」（＝詠まれた状況から想定できる言葉）が掛けられている。ただし、設問には「A、B中の語を用いて」とあるので、「門」ではなく「真木の戸」の言葉を用いること。

問5 「いとことわりなりつるは」とは「たいそうもつともなことよ」ということである。それゆえ、この設問で問われているのは、夫が何を「もつともなこと」と言っているのかということである。これはAの和歌の意味が正しく理解できていないと難しい。

問4で確認したように、「あくる」には「門を開くる」の意がかかっていた。それゆえ、「あくるまはいかにひさしきものとかはしる」には「門を開けるまでの時間がどんなに長いものかあなたはご存知ないでしょう」という意味も響くことになる。そして、この詰問を受けて、傍線部直前の「あくるまでもこころみむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなん」という、門が開くまで待っていないで帰ったことに対する言い訳が語られるのである。以上のような流れが押さええられれば、その言い訳に続けて「もつともである」と言っているのは、「自分が、門を開けるまで待ちきれずによそへ出かけて行ってしまったことに対する、作者の立腹」に対してだと自然と導けることになろう。

今の段階でこの設問が解けた諸君はほとんどいなかったと思うが、これから目指す古文学習の到達目標として、このような設問が解けるようになる必要があるということ強く意識しておいてほしい。

問6 基本単語を問う設問。「うち」には「宮中・天皇」などの意があるが、ここは「うちの方ふたがりけり」と「ある方角」にあるものとして用いられているので、「宮中」の意と判断できる。

問7 文学史の常識。作者は「藤原道綱母」、夫の名前は「藤原兼家」である。文学史の勉強は単なる暗記事項だと思っている諸君も多いようだが、うまく工夫すれば読解に役立つことも多い。疎かにしないで、しっかり取り組んでほしい。